

Title	共同體の人間學的考察
Author(s)	石川, 興二
Citation	經濟論叢 (1938), 46(1): 178-200
Issue Date	1938-01-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/131039
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第 一 號 第 四 十 六 卷

昭和十三年一月一日發行

新 年 特 別 號

資本主義と戦争	文學博士 高田保馬
絶 對 國 家	經濟學博士 作田莊一
農地自治管理論	經濟學博士 八木芳之助
ナチス主義と經濟的自己責任の原則	經濟學士 中川與之助
工場内住居施設に就いて	經濟學士 大塚一朗
シュモラーの國民經濟學方法論	經濟學士 白杉庄一郎
重農派租稅論の基礎問題	經濟學士 島 恭 彦
國際收支均衡の理論	經濟學士 松 井 清
近代地代理論について	經濟學士 山岡亮一
投資乘數の理論	經濟學士 飯田藤次
國際收支策としての輸入統制	經濟學博士 谷口吉彦
共同體の人間學的考察	經濟學博士 石川興二
新着外國經濟雜誌主要論題	

（禁 轉 載）

共同體の人間學的考察

石川 興 二

現代社會の混亂は、國際的たると國內的たるを問はずその根源を「有つもの」と「有たざるもの」との對立に發する。この問題を根本的に解決することは結局世界共同體に於ける國民共同體の實現にまで至らなければならないことは既に述べたところである。¹⁾ この今日の階級社會の共同體、變革思想を確立せんが爲めには、先づその人間學的基礎を確立しなければならないのである。²⁾

共同體的變革問題の原理的基礎は、既に古代ギリシヤに於てアリストテレスによつて明にされた。而も近代の階級社會の共同體的變革思想の全體を人間學的に基礎づけ階級社會成立の根源を「有つもの」と「有たざるもの」との對立に於て明にし、且つその共同體的變革を體系的に打立てんとせしものは、先づルソオである。こゝにはこのルソオの共同體的變革思想をその人間學的考察に基いて明にし、然る後これを批判することによりて其後の共同體的變革思想の發展方向を考察したいと思ふ。

二

ルソオの共同體的變革思想の全課題は、次の語に於て一括して現されて居る。「人間は生れた時は自由である。

1) 拙稿、『現代變革期に於ける日本國民經濟學の意義』本誌昭和十二年七月號參照。
2) 拙稿『國民共同體の人間學的基礎』本誌昭和十二年八月號參照。

然るに人間は至るところで鐵鎖につながれてゐる。……どうしてこんな變化が起つたか？……然らばこれを正當なものとなし得るものは何か？」¹⁾この二つの問題の中、前者は主として『不平等論』に於て、後者は主として『民約論』に於て答へられて居る。

總て變革思想に於ては、先づ變革すべき現實在が、對象的に把握 (Gegenständliche Auffassung) されなければならない。次にこの現實在が價值批判 (Wertschätzung) されなければならない。次にそれをこの價值評定に基いて、現實在をそれに向つて變革すべき目的として定立される Zwecksetzung とするの理想社會が明にされなければならない。然る後、それによつてこの理想社會を現實在より實現すべきところの方策が明にされなければならない (Regelgebung) ルソオの變革思想に於てはこの全體系が見られる。即ち『不平等論』に於ては主として現實在の對象的把握と現實在の價值評定が、『民約論』に於ては主として、これを實現すべき目的たる社會と、それによつてこの社會が實現せらるべきところの方策とが明にされて居る。この理想社會が國民共同體であり、これを實現すべき方策が「社會契約」であることは、既にこれを明にした。²⁾ルソオの共同體的變革思想の全體はこの『民約論』に於ける共同體的實踐思想をその土臺としての『不平等論』に於ける對象把握との一體に於て把握しなければならぬのであるが故に、こゝには『民約論』との聯關に於て『不平等論』を明にしよう。

この『不平等論』の理解の爲めには、先づこれを成立せしむるに至れる生的基礎を一應明にして置くことを要する。この當時佛蘭西は佛蘭西革命にまで發展せざるを得なかつたところの階級的專制な状態にあつた。その首都巴里にあつたルソオが彼の「自己革命」と云へるものを通じてこの著をなすに至れる事情は『懺悔録』の中に次の如

1) Du Contrat Social, Chap. I. (Classiques Garnier p. 236)

2) 拙稿『民約論に於ける共同體思想』本誌昭和十二年十一月號參照。

くに述べられてゐる。即ちその一七四九年の頃に於て、當時尙ほ巴里の上流階級との接觸の中に生活して居た彼は或る日「メルキユウル・ド・フランス」を持つて出て、讀みながら歩いてゐる中に、偶と眼に觸れたのは、デジョンのアカデミイから出してゐる。次年度の懸賞論題で、「科學及び藝術の發達は道德を頹廢せしめしや、將た純化せしめしや」と云ふのであつた。「これを讀むと直ぐに、新しい世界が目の前に展けて、私は別な人間になつて了つた。私の感情は測り難い程の速さで、私の思想と同じ高さにまで昇つた。私のあらゆる小さい情欲は、眞實、自由、道德の熱情に壓倒されて了つた。」翌くる一七五〇年、この論文が懸賞に當選したと云ふ通知は「私に此論文を書かせたすべての思想を目醒まし、その思想に新らしい力を與へ、そして終には、幼時父や、祖國や、プリユタルクなどに培養された英雄氣質と道德との酵母を、私は心の中に醗酵させた。名利と世評とを超越して、自由で有徳であり、且つ自己を恃む程、偉大な又美しい何物をも私は見出さなかつた。」「私は永久にあらゆる幸運や出世の計畫を棄てて了つた。しばらくの餘命を獨立と貧困との間に過ごそうと決心した私は、俗論の鐵鎖を斷ち、少しも他人の判斷に迷はされないで、自分のよしと認めたあらゆる事を勇ましく行ふために、自分のすべての精神の力を用いた。」「斯うした自己革命が出來上がつたから、私はもう唯これを強固にし、永續させることのみを考へた。」

彼は此主義をもつと重大な著作の中で展開させる機會を得た。それは一七五三年にアカデミイから「人間の間に於ける不平等の起因如何、而してそれは自然法により是認さるゝや否や?」(Quelle est l'origine de l'inégalité parmi les hommes et si elle est autorisée par la loi naturelle?)と云ふ題が出たからである。曰く「この大問題に

感じたにつけても、よくもアカデミイが斯ういふ問題を出したものと驚かされた。けれどアカデミイに此勇氣がある以上、私にも之を論ずる勇氣がある筈である。で、それに着手した。」「緩りこの大問題を考察するために私は一週間ばかりサン・ジェルマンへ旅行に出掛けた。……森の中に入り浸つて、其處に原始時代の面影を探つたり見出したりして、その歴史を得意氣に辿つた。私は人間のはかない虚偽を微塵に碎いた。私は大膽に人間の本性を、赤裸々に曝け出し、その本性を不具にした「時」と「物」との過程を追求し、又自然人と人間人とを對照するとに依つて世に謂はゆる「完全」の中に人間の不幸の眞因が在ることを、彼等に示さうとした。私の心は、斯う云ふ崇高な瞑想に高調して、神の間近に昇つて行つた。そしてその位置から、自分の同胞が彼等の偏執が、錯誤が、不幸が、罪惡が、盲目な道を追つて行くのを見て、私は彼等に聞えないやうな微かな聲で斯う叫んだ。「絶へず自然に不満を抱いてゐる愚人どもよ。汝等の一切の不幸は、皆汝等自身から來るものだ」と云ふことを知れ」かくの如き瞑想から、遂に『不平等論』が生れたのである。」

この『不平等論』の研究課題は以上の懺悔録に於ける記述により一應知り得るのであるが、その本論の初めに於て明にされて居る先づ不平等の概念が規定されて居る。即ち不平等には自然的なるものと人爲的なるものととの別があるが、前者は自然によつて設定されたものであつて年齢や健康や體力の差並びに精神の質の差から成る。後者は或る人々の合意によつて設定され若しくは少くとも認可されるものであつて、或る若干の者が他の者等の損害に於て享受する相異なる特權がら成る。彼等よりも富裕であることが、尊敬されてゐるとか、有力であるとか、或はもつと進んで彼等を自分に服従させると云ふが如きである。こゝに問題とされてゐるところのものは、

1) De l'inégalité. Classiques Ganier. p. 38. (邦譯、本田喜代治譯『人間不平等起源論』岩波文庫第四一頁)

こゝの第二の不平等の起因である。彼は更に「沈着公平な眼を以て人間社會を考察する。すると、最初はれそがたゞ強者の暴力と弱者の壓服とのみを示すかのやうである。……人間の制度は初め一見したところでは、脆弱な砂粒の上に築かれてゐるやうに見える。これを仔細に點檢して初めて、建物を包んで居る埃と砂とを拂ひ除けて初めて、人はその建つてゐる磐石の礎を認め、そしてその基底の尊敬すべきことを學ぶのである。しかるに人間とその自然の能力とそしてその繼起的發展との眞面目な研究がなくて、人は決してこのやうな區別を立てることは出来ない」と述べて居るが、かく不平等な社會の根底に於て、露はにされるところの「磐石の礎」「尊敬すべき基底」こそ、この不平等な社會を變革すべきものとして『民約論』に於て考察せられるところの國民共同體が、その上に確立されるべき基礎となるのである。而してこれを明にせんが爲めには、先づ「人間とその自然能力とそしてその繼起的發展の眞面目な研究」が必要とされるのである。かくてそれは先づ人間學的研究に出發する。

三

先づ彼は『不平等論』の序に於て、次の如くに述べて居る。「すべて人間の知識の中で最も有用でありながら最も進んで居ないものは人間に關するそれである様に思はれる。……人間そのものを先づ知らなければどうして人間の間の不平等の起源を識ることができようか？、そして時代と事物との繼起が人間の原本的構成の中に生ぜしめたに相違ないすべて變化を通じて人間が自然の作つた儘の相で眺められるやうにどうしてなるだろうか？また彼固有の素質に由來するものと諸種の事情並びにその進歩狀態が彼の原始狀態に對して附加或ひは變化させたものを彼が識別するやうにどうしてなるだらうか？」この爲めに彼は「もはや存在せず恐らくは存在したこともな

1) De l'inegalité. p. 38 (邦譯第三十六頁) 付點筆者以下同じ。

2) 同書、p. 33. (邦譯第二十九頁)

く多分存在しそうもない一つの状態——しかもそれについての正しい考へをもつことがわれ／＼の現在の状態をよく判断する上に必要である——を十分認識すること¹⁾を必要とした。即ち原始状態の假定である。

このルオソに於ける原始状態の假定は、人間學的研究の一つの實驗方法として考へることが出来る。現に、ルオソは、この人間學的考察に當てた第一部に於ては單に、原始状態に於ける人間性のみならず、むしろ廣く人間性一般を明にしてゐる。かくて第一部の意は一種の孤別化的理想化的方法 *Isolierende-idealisierende Methode* に²⁾よりて、複雑なる社會的諸影響より人間を抽出しその本性を明にせんとした點に存する³⁾。而も彼が社會生活前の人間性なるものは考へんとせしことは不可である。人間は常に社會に於てあるが故に、只だこの人間社會より抽出しその人間性を明にすることのみが可能なのである。以下かくて明にされたる人間性について見ることにする。

「最初の最も單純な人間精神の働き」について沈思した結果、彼は「二つの理性に先づ原理」を認めた。「そのうち一つはわれ／＼をしてその身の安全と自己存在、とに關心をもたしめ、他はすべての感情的存在殊にわれ／＼の同胞の滅び、また苦しいものを見ることを自ら嫌惡する、やうに仕向ける」⁴⁾この二つの感情が人間性の根本であつて、これは人類のあらゆる時代を通じて自己を發展し行くところの原動力であり、總ての人間社會がその上に立つところの基礎である。かくルオソは、人間性の根本を反省並に理性に先立つ感情に於て見るのであつて、このことは先づ理性主義的人間觀又は意志主義的人間觀に對するルオソの人間觀の特殊である。更に慈悲的⁵⁾感情を以て自己保存の感情と共にこの根本感情であるとしたことは、共同體の人間學的基礎として特に重要である。ルオソはこのものについて次の如く述べて居る。

1) De l'inégalité p. 35.

2) Edward Spranger. Lebensformen. 3. Auf. S. 31 以下參照。

3) 4) Dilthey Einleitung. S. 28 以下參照。

5) De l'inégalité. p. 37. (第三十五頁)

「それは人間が用ゐるあらゐる反省に先つものであるから、それだけ普遍的なまたそれだけ人間にとつて有用な徳であり且つ往々にして禽獸でさへもがその著しい徴候を示すといふほど自然的な徳である。」¹⁾母親がその子供に對する愛情や、その急を救ふ爲めに冒す危険については云ふまでもない。更に一匹の猛獸が幼兒をその母の乳房からひつたり、か弱い手足をその恐ろしい齒で喰ひちぎりその子のびくびく動くはらわたを爪で引き裂いてゐるのを牢屋から眺める人の相が描かれてゐる。何等個人的の利害關係をもたないこの目撃者であるが、何等の救助を加へ得ない事情の下でどうして苦痛を覺えないでゐられよう！「かくの如きは、あらゆる反省に先き立ち、純粹に自然の動きである、かくの如きは自然の憐憫の力であつて、最も惡化せる習慣と雖もこれを破壊すること、はむつかしい。」²⁾即ちかくの如く憐憫の情なるものは、不可壞なる人間の根本性格とされて居るのである。また「この唯一の特質から……あらゆる社會的な徳が流れ出る「寛大・仁慈・人情といふのは弱者・罪人或ひは人類一般に適用された憐憫であり、親切や友情は、特殊な對象に固定された恒常的な憐憫の産物である。」「憐憫とは苦しむ者の位置に自らをおいて見る感情にほかならない」が故に、相手に對して「より親しく自分を同一視すればするほど一層強烈である。」

「それゆゑ憐憫が一つの自然的感情であることは確實であつて、それは各個人に於ける主、我心の活動を中和し、種全體の保存に協力する。他人が苦しんでゐるのを見る場合われ／＼をして何の反省もなくこれが救助に赴かせるものはこれである。自然狀態に於て、法律・習俗及び徳に代るところのものはこれであり、而かもその優しい聲には何人もが反抗しようともしないと云ふ利益がある。」³⁾

1) De l'inégalité p. 58 (第七九頁)

2) 同書、p. 59. (第八〇頁)

3) 同書、p. 60. (第八二頁)

かくの如くルオンは自己存保の感情と慈悲の感情を以て人間の根本的性格となしたのみならず同時にこれを以て他の動物にも通ずるところの根本的なものと考へたのである。然らば人間を他の動物より區別するところのものは何であらうか、彼はこれにつき次の如く述べて居る。

「すべての動物は、感覚をもつてゐるのであるから、觀念をもつて居る、彼は或程度までその觀念を組み合わせる。……それ故動物の間で特に人間を區別するところのものは悟性ではなくて寧ろ彼の自由なる能因としての特質である。自然はすべての動物に命令する、そして禽獸はこれに従ふ。人間も同じ印象を経験する、しかも彼は自分が承諾するも抵抗するも自由であることを認める。そして彼の精神の靈性が顯はれるのは特にこの自由の意識に於てである。なぜならば物理は感覚の機制や觀念の形成を幾分説明するけれども、意欲或は撰擇の力の中に、またこの力の感じの中に、ひとは力學の法則によつてはその何物も説明されない純神靈的な行爲をのみ見出からである。¹⁾」こゝに我々はアリストテレスがその『第一哲學』に於て人間を他の存在より區別せしめて思想に等しきものを見る。²⁾

而も人間は初め動物的な状態にあるのであつて、その根本性たる自己保存並に慈悲の感情もはじめは動物に於けると同様に衝動的本能状態であるのである。即ち「自然の手により單に本能にのみ引き渡された未開人は、最初は純動物的な機能を営むあらう」かくて「未開人はあらゆる種類の明知を缺き最後の種類の感情(衝動)しか経験しない」人間の根本感情はかくの如き状態より「自由なる能因」としての状態へ如何にして高まり得るであらうか、またこの根本能力より諸種の能力が如何にして發展しうるか。これ人間に特有な「完成能力」によるのである。

1) De l'inégalité. p. 47 (邦譯第五八頁)

2) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第一三三頁參照

る。即ち「今一つ、兩者を區別する、そしてそれについては何等の異議もあり得ない別の特質が存在する。自分、を完成する能力がそれである。すなはち、諸々の事情に助けられてすべての他の能力を、逐次發展させ、そしてわれ／＼の間に種の中にもまた個體の中にも存するあの能力である。これに反し動物は數ヶ月の後には一生涯そのまゝであるところのものとなり、千年経つてもこの千年最初の年にそうであつたとほり變らない。」¹⁾これ即ち perfectibile 「完成能力」と呼んで居る。

即ち「人間悟性は感情に多くのものを負い、後者も亦前者に多くのものを負ふてゐる、われ／＼の理性が完成されるのは兩者の活動によつてである。」而して感情はその進歩をわれ／＼の知識から引き出すのである。

かくの如くに、ルオソは、『不平等論』の第一部に於て、先づ人間の本性を考察して居るのであるが、この人間の本性より人間歴史の一切を演譯せんとするのである。かくて『不平等論』の終に於て「わたくしは、不平等の起因と進歩と、政治的社會の制度と弊害とを、統治權に神權の裁可を與へるところの聖なる教義とは獨立に、それらの物が専ら理性の光により、人間の本性より演譯され得る限りに於て、これを敘述するやう努めた」と述べてゐる。故に以上の人間學的考察は、以下述べんとする彼の共同體論の全體土臺となるのである。

彼は序論に於て人間歴史の全發展を人間の二つの根本感情と理性との關係により次の如く辯證法的に規定して居る。即ち自然的狀態に於ては、自己保存の感情と慈悲の感情との「兩原理をわれ／＼の精神が色々に組み合せて創り出す合成果から自然法のすべての規則は流れ出て来る。それで後になつて、理性がその繼起的な發達により遂に自然を滅却したる時、理性はこれらの法則をまた別の基礎の上に樹て直さなければならぬ。」³⁾これが以下

1) De l'inégalité. p. 48. (第五九頁)

2) 同書、p. 92. (第一四二頁)

3) 同書、p. 37. (第三五頁)

見らるゝところの人間の歴史的発展の三段階であつて、第一は自然状態の段階であり、第二は市民社會の段階であり、第三は國民共同體の段階である。而して自然法とは一言にて云へば人間の本性に最も適合する法である。

四

先づ自然状態について考へんにルソーはこの自然状態の最初を孤立的人間の原始状態として考へた。この原始状態に於ては「土地は、その自然の豊饒に委せられ、未だ嘗て斧鉞の入らない大森林に蔽はれてゐて、一步毎に食べ物倉と隠れ場所とをあらゆる動物に提供する。人間は、これらの動物の間に分散してゐて、彼等の勤務を観察し摸し、かくして禽獸の本能の域まで昇る。」また「各人は、家も小屋もいかなる種類の財産もたず、行きあたりばつたりどこかに寢泊りした」かくて人間は「森の中をさまよひ、産業もなく、言語もなく、住居もなく、戦争も結合もなく、何等仲間を必要ともしなければ彼等を害しやうとの何等の欲求もなく、恐らくは彼等の一人々々を個人的に認識すること嘗てない」と考へた。かゝる原始状態なるものは、彼自ら云へるが如く、當時「臆測」した假定的状態である。而も尙ほ彼はかゝる状態が將來の研究進歩により人間の原始状態として實證されるに至るべきことを期待して居る。然しその後の研究はかゝる状態存在を否定するに至つた。即ち十九世紀に旺となりし未開民族の研究は原始民族の生活状態を理解すべき鍵となり、人はその最も原始的な状態にあつても群生的状態にあることが益々明にされた。²⁾ また自然の動物の共同生活に關する研究もこのことを明にする助となつたのである。³⁾

ルソーはこの原始状態より次の状態への發展を産業の成立を媒介として考へた。即ち原始状態に於てやがて色

- 1) De l'inégalité. Notes. j. 參照
- 2) 例へば Marx Euegels の社會的思想に共同體的の影響を與へた Morgan, Ancient Society 1877. 參照。
- 3) Kropotkin, Mutual Aid. 參照。

々の困難が顯れて來て、これを征服することを學ばねばならなかつた。即ち人類が擴大して行くに従ひ人間の數と共に苦痛が増加した。土地や氣候や季節の差異が彼等をしてその生活様式に差違を導入せしめた。不作の年々や嚴しい冬や焼くやうな夏が新しい産業を要求した。海や川の沿岸では絲と針とを發明し、漁夫となり魚食者となつた。森の中では弓と矢とをこしらへ、獵師となつた。かく種々なる存在を彼自身にまた彼等相互に反復適用した結果は、自然人間の精神の中に或種の關係の知覺を生ぜしめた。彼等の間に時の經過と共に認め得たところの相似點が、彼のまだ認めなかつた相似點をも判斷せしめた。そして、同じ事態に遭遇すれば、彼等も同様に行動するのを見て、他の人々の思惟及び、感情の仕方が全然自分のそれに一致するものと結論した。「彼の精神内に確立されたこの重要な眞理が：最初の行爲の規準を、自分の利益とその安寧とのため他の人々と共にこれを行ふことが好都合であるやうな行爲の規標を彼に遵奉せしめた。共通の利害關係からその同胞の援助に頼らなければならぬ場合には彼は彼等同胞と團結した、或ひはせいぜい何人をも拘束しない——そして結合を促した一時の欲望と同じだけしか持續しない——一種の自由協會を成して集まつた。かやうにして人々は知らず識らずの間に相互扶助 engagement mutuel とそれを行ふことの利益といふ粗末ながらも何等かの觀念を擧得ることが出来たのである。」¹⁾尤もそれはただ現前の感覺的利害がこれを要請し得た限りに於てのみである。これ彼等には先見と云ふことは皆無であつたからである。ルソオに於てかくの如く人間の發展の最初の契機が人口の増加に伴ふ産業の成立に於て見られた。かくて人間は新な狀態に進み入る。即ち「かうした初期の進歩が人間を一層速かな進歩をなし得る状態においた。精神が開明されるにつれて彌々産業 Industrie が完成された。……人は若干種の堅い

1) De l'inégalité. p. 68. (第九八頁)

刀のついた石斧を見出した、これは木を切り、土を掘り、そして枝葺き小屋を作るに役立つたが、この小屋をひとはやがて粘土や泥で塗ることを思ひ付いた。これが即ち諸家族の設立と區分とを形成した。そして一種の私有財産を……導入した最初の革命の時代であつた。¹⁾

「二つの新しい事情が夫と妻と・父と子とを共通の住居に結合し、心情の最初の發達と云ふことがその效果であつた。一緒に生活する習慣が、人々に識られてゐる最も優しい感情・夫婦愛と父性愛を生ぜしめた。各家族は相互の愛着と自由とがその唯一の紐帶であつたためそれだけ一層よく統一された一小社會となつた。そして從來たゞ一つの生活様式しかもつてゐなかつた兩性の生活様式に最初の差異が出來たのがこの時である。女達は一層定住的となり、そして小屋と小供とを守るやうな習慣になつた、これに對し男はみんなの生活資料を探しに行つた。²⁾」

かくてこゝに「愛着と自由とが唯一の紐帶」である最初の社會が成立する。『民約論』に於ては「あらゆる社會の中で、最も古く且つ唯一の自然な社會は家族と云ふ社會である」と³⁾なし、この家族に於けるこの「雙方に共通の自由は、人間の本性から生ずるものである、人間の第一の本分は、自己の生命の保存を念慮することである。」⁴⁾として居る原始狀態に於て孤立的に充された自己保存の感情は今や慈悲的感情に基く家族的愛着の土臺の上に於て充されるのである。更に「家族は、政治的社會の最初の雛型である」と述べて居るがこの政治社會は共同體 *la communauté* なるが故にこの家族は原始共同體と云はれ得るものである。

ルソオは更に進んでこの家族の聯帶として民族なるものを考へた。即ちかくて安定な落着き場所を得た人々

1) De l'inégalité. p. 69. (第一〇〇頁)

2) 同書、p. 70 (第一〇〇頁)

3) 4) 5) Du Contrat Social. Livre I. :Chap. II. Des premières sociétés.

は、徐々に相接近し、「種々の集群を成して結合し、終ひに各地方に於て個々の民族を規則や法律によつてではなく、同じやうな生活と食物とにより、また共通な氣候の影響によつて、習俗と性格とを均しくする夫々の民族を形成する。永久的な隣接は終ひに諸家族間に或紐帶を發生せしめないわにては行かない。……諸々の觀念や感情が繼起し、精神と心情とが習練されるに従つて、人類は益々馴化して行き、結合の範圍は擴大し、紐帶は緊縮する。」かく共通の氣候と生活様式の下に成立つところの習慣と性格を一にする民族なるものが成立する。このものも家族の聯帶として愛着と自由を唯一の紐帶とする自然共同體的な結びにあるものとして考へられねばならない。

ルソオはかくてこの状態を人間歴史に於ける最も幸福な時代であつたと考へる。即ち人間能力の發達のこの段階は原始狀態の香氣さと市民社會の性急な活動との丁度真中に位し、「最も幸福なそして最も持續的な時代であるに相違ない。これについて反省すればするほど、この状態が最も革命に罹りにくく、人間にとつて最上のものである」

ルソオは自然狀態の最初たる孤立人の原狀態は、これを「臆測」により考へたのであるが、この原始社會狀態については「未開人は殆んどすべてがこの段階に於て見出されたのである」と云ふて居る。即ちこの状態は其後に未開人の生活狀態研究を鍵として明にされた原始共同體の時代に相應するのである。只だ原始家族はルソオによつて考へられたよりも大なる氏族的な家族であり、この大家族を土臺として、部族、種族、民族等の更に大なる自然共同體的團結が成立したのである。

五

ルソオがかくも幸福な永續的な状態として考へた原始社會は如何にして終焉に至るのであらうか？彼はこの原始社會を市民社會へ轉化せしむるに至るところの決定的なるものを、土地の私有に於て見た。即ち第二部の冒頭に於て「土地に圍ひをして「これは俺のだ」と宣言することに思ひ付き、そしてそのまゝ信ずるやうな極く單純な人々を見出した最初の者が市民社會 *la société civile* の眞の建設者であつた」と述べて居るが、この土地の私有が成立するに至る過程を次の如くに述べて居る。

先づこの自然共同體的段階に於て農業が成立するに至れるは恐らくずつと後である。何となれば狩獵や漁撈と共に彼等に食料を供した樹木が彼等の配慮を要しなかつたからであり、或ひは小麥の使用が識られず、これを栽培する道具がなく、來るべき必要に對する先見が缺けてをり、また自己の勞働の果實を他人が占有するのを妨ぐる手段がなかつたからである。農業が成立するに至れば、「耕作者に、その耕した土地の生産物に對する權利を與へ、從つて地所に對する權利を——少くとも收穫時まで、かくて年々——與へるものは獨り勞働だけである。これが持續的な所有を造り出し、容易に私有に轉化する¹⁾」

この私有の發生は經濟的な不平等を齎らすこととなる。即ち最も強い者はより多くの仕事をした、最も器用な者は自分の仕事からより多くの利益を引き出した、最も伶俐な者は勞働を短縮する手段を發見した、同じ様に働きながら或者は澤山儲けるのに他の者は生きるだけでも難儀した。かくの如くにして、自然の不平等が人爲の不平等と共に、知らず識らずの間に展開する、そして事態の差別によつて發展する、人々の差別は一層著しくなり、その効果はより永久的となる、そして同一割合で個々人の運命に影響し始める。一面に於ては競争となり、他面

1) De l'inégalité. p. 75. (第109頁)

に於ては利害の對立、そして常に他を顧みずして自ら利を收めようとの隠された欲求。これ等一切の惡が私、有、の、最、初、の、效、果、で、あ、り、新、生、の、不、平、等、と、切、り、離、す、こ、の、の、出、來、な、い、附、隨、事、項、で、あ、る、。

而もルソオはこの新しい狀態に置れた人類に於てはじめて人間の一切の能力が發展し來ると考へた。即ち記憶と想像とは働き自尊心は旺となり理性は活潑となる。今やあらゆる天賦の能力は實現され「各人の等級と運命とは單に財産の分量と勤勞及び加害の力量に關してのみならず、精神、美、體力、或ひは手腕に關し、功業や才能に關しても亦、確定される。そしてこれ等の性能はひとの注意を惹き得る唯一のものであつたから、やがてはこれをもち若くはもつ風をすることが必要となつた。」¹⁾

この狀態に更に富者と貧者との分裂、對立が現れて來る。即ち「富を表徴する記號が發明されるまでは富はただ土地と家畜——人々の所有し得た唯一の財物——とから成立し得た。然るに相續財産が數と範圍とに於て増大し、さうして地面全體を蔽ひすべてが互に相觸れるやうになつた時、或ものは他のものを損害せずしてはもはや増大することができなくなつた。そして無力乃至無頓着のために自分の分を攫ることができなくて數に漏れた者達は、周圍のものが皆變るのに彼等だけは一向變らなかつたために、失ふべき何物をもたずして貧乏となり、止むを得ずその生活資料を富者の手から貰つたり奪つたりした。そしてそこから銘々の性格に従ひ、支配と服從、或ひは暴力と横領が誕生し始めた。富者はまた支配することの快樂を識るや間もなく他の一切の快樂を蔑視した、そしてその舊奴隸を新しい奴隸を從へるために利用し、かくて隣人を制御し隷從させることしか考へなかつた、——一度人肉の味を識るや他の一切の食糧を拒否し爾後人間を貪り喰ふことのみ欲するあの餓ゑたる狼と、丁度同じ

1) De l'inégalité. p. 75. (一一〇頁)

やうに。¹⁾かくてこゝに無秩序状態が現れる。

即ち、「かようにして最強者乃至最貧者がその力乃至その欲望を他人の財に對する一種の權利——彼等によれば所有權と等價になる——としたので、破られた平等に引き續いて最も恐ろしい無秩序が到來した。かやうにして富者の篡奪、貧者の剽盜、萬人の放縱な感情が、天賦の憐憫と今尚ほ弱い正義の聲とを窒息させて、人々を吝嗇に、野心家に且つ邪惡にした。最強者の權利と最初の占有者の權利との間に一つの無期限な軋轢が起り、それは鬭争と殺害とによつてのみ終熄した。」かくの如く嘗て原始社會がその上に確立され、これを共同體的存在たらしめて居たところの「憐憫の情」又は「慈悲的感情」なるものは、に壓迫され、かくて自己保存の感情のみが、今や理智的に、利己的にその力をたくましくするのである。かくて原始社會は「最も恐ろしい戦争状態」²⁾に代つた。而も「墮落しそして荒んだ人類は、もはや後戻りすることも、不幸にして攫得したものを棄てることも出來ず、そして自分の名譽となる諸能力を濫用することによつてたゞ恥を搔くために勞働し、かくて自ら廢滅の前夜に身を置いた」³⁾即ちこの状態にまで進み來れる人類は、もはや嘗ての幸福な自然状態に歸することは出來ない。この市民社會より市民國家への推移が起る。

六

即ちこの無秩序状態から富者の爲めの政治的社會が成立するに至る。「富者は自分達だけがその一切の費用を負擔した恒久的な戦争が彼等にとつていかに不利益であるかをすぐに感じたに相違ない、戦争に於ける生命の危険は共通であつたが財産のそれは特殊であつた。加之彼等がその篡奪にいかなる色彩を與へようともそれ等の

1) De l'inégalité. p. 76. (第一一二頁)

2) 3) 4) 同書、p. 77. (第一一二頁)

纂奪が一時的にして不當な權利の上にしか打樹てられてをらず、且つそれはたゞ力によつて攫られたものであるから、これに文句を言ふ理由をもたない、と云ふことを彼等は十分に感じてゐた。¹⁾「富者は終いに「嘗て人間の精神に入り込んだものの中で最も反省された計畫」を考案した、それは、これらを攻撃した者達の力そのものをこちらのために利用することである。「團結しよう」「われ／＼の力を一つの最高權力に統合しよう。」と彼が彼等に言つた。單純で煽てに乗り易い人々を唆かすためにはこんな演舌のやうなものすら要らない位であつた。

かくの如きが政治的社會並に法律の起原であつた。その結果は貧富の不平等の恒久化である。即ち「それが弱者に桎梏をそして富者に新な力を與へ、天賦の自由をすつかり破壊してしまひ、私有及び不平等の法を永久に確定し、狡猾な纂奪を以て取り消すことのできぬ權利となし、そして、若干の野心家を利するため、爾後全人類を勞働に、隸屬に、且つ貧困に服従せしめたのである。」²⁾

こゝにルソオは更に諸政治體の成立とその相互間の關係について述べて居る。即ちかくて一つの政治社會が成立することは、この結合した力に對抗するために他の結合を促す結果となり、かくて政治社會は、急速に増加若しくは擴大しつゝ、やがて地球の全表面を蔽ふた。これ等政治體間の關係は政治社會成立前の無秩序と同様の状態にある。「天賦の憐憫は、人と人との關係に於てもつて居た殆んど一切の力を社會と社會との關係に於て喪失してしまひ、今では諸國民を分つ想像上の境界を乗り越えるやうな、また彼等を創造した最高の存在の例に倣つて全人類をその慈悲心に抱擁するやうな若干の偉大な一視同仁的精神の中に、しかもはや見出されない。」即ち原始社會の状態に於ては、小社會としての家族自體が慈悲心に基ける共同體であつたのみならず、家族相互間がま

1) De l'inégalité. p. 77. (第一—三頁)

2) 同書、p. 79. (第一—六頁)

た慈悲的關係に於て結ばれて居たのであるが、今や國家間に於ては全く失はれる。そこから諸政治體間に自然を戰慄せしめ理性を衝擊する國民戰爭・戰鬪・殺戮・復讐が、出て來るのである。人類がかかる状態より脱すると云ふことはこゝにルソオの云ふところの「人類を抱擁するやうな偉大な一視同仁的精神」が國家間に實現して人類共同體なるものが成立することによつてのみ可能であることは後に述べる如くである。

かくて富者によつて富者のために生れ出でた政府は、決して恒常正則な形態を備へてゐなかつた。哲學と經驗との缺乏が眼前の不便だけしか認めしめなかつた。彼が、缺點を發見し療法を示唆しつゝも、しがも組織そのものの惡はこれを改善することが嘗てできなかつた。後でよい建て物をたてるためには先づ地面を掃ひ清めて一切の古い建築材料を遠けなければならなかつたのであるのに、ひとは間斷なく繕ひばかりをして來たのである。かくて不便と無秩序とがどこまでも殖えて行つたので、終いに人は危險な公權力の保管を私人に委託しようと考へ、そして人民の議決を遵守せしめる仕事を司法官に委任するやうになつた。一切の長官職は最初選舉制であつた。而も選舉には策謀が導き入れられ、徒黨が出來、黨派の軋轢は激しくなり、内亂が勃發した、そして將に前期の無政府状態「anarchie」に再び落ち込まふとしてゐた。首長連の野心は、自分達の職務を世襲化するため、かうした事態を利用した。「かやうにして、世襲となつた首長連は、その長官職をば一の家財と見做し、己れ自身を國家の所有主と見做すやうになり、その市民をばその奴隸と呼び、彼等を、宛かも家畜のやうに、その所有物の中へ數へる習慣になつてしまつた。」¹⁾

「これがすなはち不平等の最終項、そして圓を閉ぢる極點、われゝの發足した起點に觸れる終點である。こゝ

1) De l'inégalité. p. 87. (第一三一頁)

に再び個々人がすべて平等となる、といふのは、今や彼等は無であり、そして臣民はもはや主人の意志のほか何等の法律をもたず、主人は自分の熱情のほか何等の規則をもたず、善の社會や正義の原理が復た消滅してゐるのであるから。すなはちこゝで一切がたゞ最強者の法に、また従つて一つの新しい自然狀態に歸着する、この狀態がわれ／＼の發足點としたところのそれと異なるのは、後者が純粹に自然狀態であつたのに對し前者が過渡の腐敗の結果であると云ふことである。しかしこの兩狀態の間には殆んど差別なく、政府の契約は專制主義によつて解消してしまつてゐる、それとて專制君主は彼が最強者である間だけしか主人でない¹⁾。」

これ即ち富者の爲めに立てられた政治的社會の終末狀態であつて、そこには人間の慈悲的感情は壓迫され、自己保存の感情のみが利己的に肆にされて居るのである。『民約論』に於ては第三章『強者の權利』並に第四章『奴隸』に於て述べられて居るところのものである。

七

以上述べ來つたところは原始狀態よりこの專制狀態への發展であつて、これが、主として『不平等論』の内容をおすところのものであるが、この專制狀態より正しき政治的社會への展開は、主として『民政論』の内容を成すところのものである。このことについてはこゝには只一言するに止める²⁾。即ちこの專制の下にあつては「人類はその生活狀態を變へなければ滅亡してしまふことゝなる。」而も「人間は新しい力を生み出すことはできるものではなく、たゞ既に有する力を結合しこれを統制することしか出來ないのだから、自己を保存するためには、力を合一して總和となし、これによつて抵抗に打ち勝つより他に道はない。」これ即ち「社會契約」のあるものゝ意義であ

1) De l'inégalité, p. 90. (第一三八頁)

2) 拙稿『民約論に於ける共同體思想』本誌昭和十二年十一月號参照

る。こゝに「團員によつて組成された道德的にして且つ集合的な一體 un corps moral et collectif が生れる。此團體は、この行爲からその統一とその共同物とその生命とその意志とを受ける。」これが眞の意味で國家、*Etat*であり、また共同體 *la communauté* と呼ばれて居るところのものである。

こゝに至つてはじめて人間性の完全なる實現が達し得るのであつて、これが眞の人間生活である。即ち「此の自然状態から社會状態への推移は、極めて著しい變化を人間に與へる、從來の人間の行爲を支配してゐた本能 *l'instinct* を正義 *la justice* に代へ、人間の行爲にこれまでなかつた道德性 *la moralité* を與へる。この時に至つてはじめて、肉體的衝動 *l'impulsion physique* が退いて義務の聲 *la voix de devoir* がこれに代り、正義が欲望の代りをつとめるやうになる。その時まで自分のことだけしか注意しなかつた人間は、他の原則に基いて行動しなければならなくなつたことに氣づき、自己の欲求に聽従する前に、自己の理性に相談しなければならなくなつたことに氣づく。……彼の技能は習練されて發達し、彼の思想は廣くなり、彼の意見は高尚になり彼の精神全體が高められるから、此新しい條件の濫用が、屢々以前の自然的狀態以下に彼を墮落させることさへなければ、彼は、永久に彼を自然狀態から離脱させ、無智蒙昧な野獸を理智的生物即ち人間とした此幸福な瞬間を絶へず祝福せねばなるまい。……社會的狀態のたまものとして、道德的自由を附加することも出来る。この道德的自由こそ、人間を眞に自己の主人たらしむる唯一のものである。」¹⁾

このことは「自ら完全にして獨立せる全體である個人を、この個人に或意味に於てその生命と存在とを與へるところのより大なる全體の一部に變へ、……我々が自然から受けとつたまゝの個々獨立した肉體的なる存在に代

1) Du Contrat social p. 246.

ふるに全體の部分としての精神的なる存在を以てすることである。またそれは「人間からその本來の力を奪つて、人間がこれまでもつてゐなかつたところの力、他人の助力をかりなければ使用することのできない力を人間に與へる」ことである。「この自然のまゝの力が死滅すればする程、新たに得た力は大きくなり、永續的となり、その制度は益々鞏固となり完全となるのである」即ちこゝに人間の本性は動物的本能的衝動的な状態より自覺的精神的な状態に高められたのであつて、原始共同體の基礎とその慈悲的衝動は今や慈悲的精神となつて國民共同體を基礎付け、この國民共同體に於て自己保存の本能は「人間を眞に自己の主人たらしむる」ところの道德的自由として實現せられるのである。即ちこゝに眞の平等と自由があるのである。

八

既に述べし如く、彼は『不平等論』の結論に於て「わたくしは、不平等の起因と進歩と、政治的社會の制定と弊害とを、統治權に神權の裁可を與へるところの聖なる教義とは獨立に、それ等のものが専ら理性の光により人間の本性から演繹され得る限りに於てこれを敘述するやうに努めて來た」と述べて居るが、我々は、以上に於て彼が、國民共同體にまで至る人類の發展を、その人間觀より、如何に展開したかを見たのである。このことは先づ人間の社會並に歴史の、形而上學的基礎づけを否定し、これを人間自體の原理に基礎付けんとするものである。而してこのルソーの論に於て我々は、共同體思想の人間觀、社會觀、歴史觀並に實踐論を見るのである。

先づ人間觀については、人間性の根本を感情に於て見て、この根本感情を自己保存の感情と共に慈悲的感情であるとしたことは、共同體の人間學として重要である。

その社會觀に於ては、この人間觀が、諸種の社會を基礎付けて居る。先づ原始社會は慈悲的本能によつて基礎づけられて居るところの自然共同體であり、市民社會は自己保存欲に基礎付けられ、國民共同體は自覺的理性的な慈悲的感情に基礎づけられそこに肉體的自己保存の本能が眞の自己の道德的自由にまで高められる。

その歴史觀に於ては、その始めに孤立的な人間の狀態が考へられて居るが、人間社會そのものは原始共同體より市民社會を通じて國民共同體に至る發展である。即ち人間性は新な事情に應じて新な發展をなし、以て新な制度を立てるに至り、この新な制度の下に於て新な發展を果けるものとして考へられて居る。即ちそこには人間性と制度とが相關的に發展し行くものとして把握されて居る。而もこゝに注意せらるべきはこの移推の契機として更に經濟的事情が重んぜられて居ることである。即ち原始的孤立狀態より原始社會へは産業の成立が、原始社會より市民社會へは農業の成立に伴ふ土地の私有が、その媒介として重んぜられて居る。只だ市民社會より國民共同體への發展については、社會契約に於て人間心の契機は述べられて居るが、經濟的契機が明にされて居ない。このことは後にマルクスによりて特に力を用ひられたところのものである。

ルソオの實踐論は、以上の人間觀と社會觀と歴史觀との上に打立てられて居る。彼は先づ變革さるべき現實社會を明確に階級社會として把握した。而してこれが變革に於てそれを實現せんとするところの形相因は國民共同體であり、それによつてこの變革をとげんとする動力因は社會契約であり、それが爲めにこの變革をなさんとする究極因は、人間の本性に基く人間生活の完成である。即ち彼が人間學に於て明にせる人間の本性は、こゝに完全なる實現に達するのである。かくて彼の人間學的考察はその社會觀、歴史觀、實踐論の一切を貫いて居り。そ

の共同體的思想全體を成立たしめて居る。

以上がルオンに於て成立したところの共同體的變革體系であるが、これとの關係に於て、共同體的變革思想の發展を見るならば、先づ人間學に於ては感情を中心とし根底とする人間觀が、デイルタイの人間學等に於て發展せしめられ、感情を中心とし根底とすることによつて人間の實踐的構造が明にされたのである。¹⁾

次に社會觀については、原始共同體の研究が進むことによつて原始社會としての民族社會の構造が明にせられ、従つて人間の孤立的原始狀態なるものが否定せられ、更にルオンに於て原始社會とされし家族なるものがこの大家族より分化せしものなることが明にされたことである。また國民共同體の諸類型とその内部の共同體的構造が明にされなければならない。²⁾

その歴史觀に於ては、人間社會の出發點が民族的共同體に於て見られ、このものよりの市民社會の成立過程が明せられるに至つた。更に歴史的發展の構造については、ルソオに於て見らるゝところの心的方面と物的方面とが、唯心史觀並に唯物史觀として分化發展した。而してこの兩者を再び統一することが今日の重要問題となつてゐる。³⁾

實踐論に於ても、その各々が更に明確に規定されなければならない。ことに動力因については、現實在の分析の中に更に有力なる動力因の規定がなされねばならない。更に進んで人類共同體の實現が考察されねばならないのである。⁴⁾

1) 2) 拙稿『新國民主義と國民共同體』本誌昭和十二年一月號參照
3) 拙稿『國民生命史觀』本誌昭和十二年三月號參照
4) 拙稿『國民生命史觀の諸問題』本誌昭和十二年四月號參照